



Title	記憶をめぐる闘い : 連作第五部
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 1986, 72(2), p. 53-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

記憶をめぐる闘い

——連作第五部——

注1)

武 藤 洋 二

БОРЬБА ЗА ПАМЯТЬ

МУТО Ёдзи

Содержание

1. Смерть поэта.
2. “Бог хранит всё.”
3. Борьба за “Реквием”.
4. Судьба “Реквиема” при Брежнев.

Примечания.

Приложение.

Дополнения.

1

スターリン時代がつくりだした多くの無縁仏たちを、詩によって葬い、悼んだアフマートヴァに、死の順番がまわってきたのは、スターリンの十三回忌の当日であった。

アフマートヴァは、四回目の心筋梗塞でモスクワの病院に入院し、快方にむかい、療養所に移り、その翌日、急死した。1966年3月5日、詩人は、七十六年九カ月の生涯をおえた。遺体は、レニングラードに運ばれ、棺は、ニコリスキイ寺院におかれた。3月10日に告別式がおこなわれる。キリスト教による葬儀は、一部に批判をまねく。かつてアフマートヴァを除名した作家同盟レニングラード支部でも、無宗教の告別式がおこなわれる。遺体は、その日のうちにコマローヴォの森のなかにある墓地に埋葬され、墓には木の十字架がたてられた。

ソルジェニーツィンを全世界に紹介したアレクサンドル・トヴアルドーフスキイは、追悼文のなかで、「ある時期わが国でおこなわれた極めて不当で粗暴な攻撃²⁾」にもかかわらず、アフマートヴァの詩が少数の読者から幅ひろい読者大衆へ浸透していったと故人の力をたたえた。これは、シダーノフ批判が、アフマートヴァを民衆からうばうのに失敗したことを意味する。

「詩人の新墓の前でそれらの攻撃について口をつぐむのは、罪ぶかいことだろう。なぜなら、アフマートヴァの文学における、人生における運命がまれにみるほどつらいものであり、その運命の

あらゆる試練を彼女が尊敬せざるをえないような頑張りと尊厳をもって通りぬけたからでもある。攻撃そのものに関していえば、それは、とっくの前に現実によってはねかえされており、しかも、偏見にとらわれた、論証ぬきのあらゆる批判がそうであるように、予期しなかったような反応を読者にひきおこした。³⁾」

ジダーノフ批判は、スターリン批判後も、取消しも修正もされず、政治的には生きている。作曲家についての1948年の党中央委員会決定は、個々の作曲家とその作品にたいして誤った批判をおこない、そこにはスターリンの主観的な評価が反映されているとして、1958年に訂正のための党中央委員会決定がだされた。類似の決定でありながら、アフマトヴァとゾーシチエンコにたいしては、そのような処置はとられなかった。

トヴァルドーフスキイは、現実の発展とアフマトヴァの詩の力が、その決定を葬ったと、受難者であった故人に告げている。国をあげてアフマトヴァを攻撃していたとき、詩人たちは、声をあげることも手をさしだすこともできなかった。批判の大合唱に口をあわせ、作家同盟からの除名に賛成させられた。トヴァルドーフスキイは、追悼文のなかでアフマトヴァを讃えることによって、自分の心のつかえをときほぐそうとしているかのようである。

死の前年に出た『時の疾走』のなかに、アフマトヴァの「ほとんどすべて」の詩が入ったと、トヴァルドーフスキイは喜こんでいる。アフマトヴァの強制された沈黙、活字の世界からの追放と発表許可との天秤が、まるで、つりあったかのようである。「新墓のまえで」彼が告げるべきことは、『時の疾走』の背後に、息子を人質にとられながら創った詩群が、民衆への鎮魂の詩群がとに残されていることである。

アフマトヴァが死んだ1966年、フルシチョフ時代の残光がまさに消えようとしていた。これは、スターリン時代の苦しみについて、ぼんやりとほのめかすことが許された最後の年である。詩集の外側にわだかまっている過去に、トヴァルドーフスキイも深入りできなかった。

アフマトヴァは、自分が歌ったあの過去と切れないままに死んだ。「血だらけの敷石」がひろがっている過去から木魂^{こだま}する、それは、どんなに頼んでも黙ってくれない、と七十才のアフマトヴァは詩に書いた。⁴⁾ ブレージネフ政権は、公的な場から都合の悪い歴史的記憶を追放したが、民衆の心の中でひびく木魂^{こだま}を消すことはできない。

2

ソポクレスの死

そのとき皇帝はソポクレスの死を悟った。（伝説）

夜ソポクレスの家に天から鷲が舞い下り、

蟬の合唱がとつぜん庭から陰気にひびき始めた。
 生れた町の城壁のそばの敵陣を素通りして、
 このとき天才はすでに不死へ向っていた。
 皇帝が奇妙な夢を見たのはまさにこのときだった、
 かこみを解けとデイオニソス神みずから帝に命じた、
 ざわめきで葬いを邪魔しないように、
 神の慰みへアテネ市民が弔意を表せるように。⁵⁾

1961年

アテネは敵軍にかこまれている。九十才の詩人ソポクレスは、息をひきとった。詩人は、忘却の死の世界へ消えるのではなく、不死へ向う。自分の創った詩が自分を不死にする。真の詩人の弔いは、不死への旅立ちの儀式になる。ソポクレスは、アテネの民衆にも神にも愛された。アテネの市民たちが詩人を見送るのをさまたげないように、神デイオニソスは、軍の包囲を解けと地上の権力者に命じた。

七十才をすぎたとき、アフマートヴァは、この詩を書いた。詩人として「破滅の翼の下で丸三十年生きた」⁶⁾アフマートヴァは、自からの死を予感しながら、ソポクレスの運命を羨望している。

「ソポクレスの死についての私の詩は、芸術と権力とのあいだの関係を理解するうえで極めて大切なものです。これは、そうあらねばならない関係です。これは教訓です。」⁷⁾

アフマートヴァの死は、ソポクレスのように、あつかわれなかった。『鎮魂歌』やそれに近い詩群は封印されたままである。禁じられた詩の封印を解けと権力者に命じる守護神は、アフマートヴァにはいなかった。『ソポクレスの死』は、夢のまた夢であった。

アフマートヴァが三十年以上すごした噴水邸の中庭のくぐり戸にラテン語の金言がかかげられている。

「神は全てを保ちたまう」

この神の仕事に彼女は詩人としてたずさわった。それは、消された命についての消された記憶を保つ仕事である。その仕事は、権力の犠牲者について追憶も追悼も禁じられていたときに、おこなわれた。「神は全てを保ちたまう」は、民衆の記憶係の住いにふさわしい額であった。

アフマートヴァが死をむかえる頃には、フルシチョーフ時代に許されていた犠牲者への追悼は禁じられ、追想は死を避ける条件付で許され、伝記は死の説明なしに終わるのがしきたりになった。

この詩人の遺言歌は、『鎮魂歌』のなかにある。もしも、いつか自分に記念碑がたてられるとしたら、囚人の肉親たちと共に立ちつくした十字獄の前にしてほしいと、詩人は後世に語りかける。

なぜならありがたい死のさいにも
 囚人護送車のひびきを忘れるのが恐いから。

厭な扉が音をたてて閉まり

老婆が手負の獣のように泣きわめいたのを忘れるのが恐いから。⁸⁾

たとえ死後であっても、「忘れる」ことを自分に許さない。民衆の受難を、記念碑という金属の体で表現したい。

まばたきしない青銅のまぶたから

とけた雪が涙となってほとばしれ。⁹⁾

記念碑は、たてられなかった。しかし、鎮魂の詩を「破滅の翼の下で」つくりつづけた詩人は、民衆の受難史の化身となって、こんどは自分自身が民衆の記憶に守られるだろう。

3

リージャ・チウコーフスカヤは、紙に書けないアフマートヴァの詩を記憶し、語ることの許されない語部^{かなりべ}としてすごした二十年のあいだ、「人民の敵」の妻であった。夫は1937年8月のある日とつぜん行方不明になり、その運命について公的な通知はこなかった。夫は殺されていた。逮捕も銃殺も妻に知らされなかった。夫が消えて二十年たった1957年、スターリン批判の翌年に、未亡人チウコーフスカヤは、一片の紙きれを受けとった。

死亡時期 38年2月18日

死因 抹消

場所 抹消¹⁰⁾

夫にたいして「死後の名誉回復」という政治的追善供養がなされたあとでも、命日だけしか妻に知らせない。知らされたのは単なる死であり、殺害ではない。これが、スターリン時代の「誤り」を調査していた「非スターリン化」のまっただ中での処置である。

チウコーフスカヤの夫マトヴェイ・ブロンシテインは、レニングラード大学教授で才能ある物理学者であり、その業績は、半導体、重力理論、核物理学、天体物理学にわたっている。無実の罪で殺された時、三十一才であった。一説によれば、彼の名ブロンシテインがトロツキイの本名と同じだったので逮捕されたという。この説明を笑殺することはできない。そのようなことすら死に値する時代であった。

夫を殺しながら妻にも知らせなかったスターリン時代、「人民の敵」を「名誉回復」しながら未亡人に死因も死に場所も隠したフルシチョフ時代、スターリン権力の犯罪行為についての記憶の抹殺に国家的事業としてとりくんだブレジネフ時代を通して、チウコーフスカヤは、記憶のため

に闘いつづけた。

ブレイジネフ時代に入ってすぐ児童文学出版所のレニングラード支社が、チウコーフスカヤにミーリチクの『スチョープカの子供時代』への序文を依頼した。イサーイ・イサーエヴィチ・ミーリチク（1880—1938）は、チウコーフスカヤの夫と同じ年の同じ月に同じように殺された。彼女が序文を送ると、出版社は、「つらい過去」にふれた部分をけずるように電話でたのんだ。彼女はことわった。¹¹⁾

「1938年2月イ・イ・ミーリチクは逮捕された。それにサ・ヤ・マルシアークによってつくられた編集者集団もつぶされた。ある者は逮捕され、ある者は首になった。」¹²⁾

この部分の削除に応じなければ、序文は印刷しないと出版社は彼女に通告した。

チウコーフスカヤは編集者に返事をかいた。

「わたしとあなた（出版社）との間の論争は、『一行一句』をめぐるのではなく、人間の血と人間の言葉をめぐっておこなわれています。あなたが出版される本の著者、すばらしい作家でわたしの親友であり、党员で、民衆出の人間で、古くからの労働者で、二つの革命の活動的な参加者であったイ・イ・ミーリチクは、1937—38年、スターリンの蛮行の時期に死に追いやられ、殺されたのです——何百万の罪のない人びとと一緒に。

このことを、後の世代が、殺された者たちの子供や孫たちが、知るべきです、あるいは、知ってはいけないのですか。

ぜひとも知るべきだとわたしは確信しています。一般的な形だけでなく、具体的な人間の運命を例にしてこのことを語るのは、生き残った者の直接的な義務であり、名誉ある仕事です。

あなたは別のお考えですね——あるいは、義務として別の考えをもたなければならないのですね。

あなたを説得するつもりはありません。しかし、流血を沈黙によっておおい隠そうとする新しい嘘に一まいかむつもりもありません。

イ・イ・ミーリチクは、二十五年ほど前に命をうばわれました。十年前に死後名誉回復しました、そして、四分の一世紀後、彼の本と輝かしい生きざまにささげられた序文のなかで、さらりと、ちらりと、『一行一句』で彼の破滅の原因にふれる可能性をわたしたちは奪われているのです。

ひどい話です。

あなたは、光栄にもわたしの序文を『良い』『必要な』とおっしゃった、しかし、ミーリチクの横死についての文句を削除しなければ、あなたはその掲載を拒否される。しかしながら、この文句なしには、『良い』『必要な』序文は、すぐさま嘘っぱちの、つまり、悪い有害なものになってしまいます。新しい世代の人たち、あなたがその利益を盾にとっている読者

たちには、真実——それも、ミーリチクの中篇小説があつまっている前世紀の九十年代についての真実だけでなく、今の子供たちの父親たち祖父たちが命をうばわれた今世紀の数十年間についての真実が必要です。正しく語られた祖国の歴史が青少年のためのまたとない教育手段であることは今さら云うまでもありません。あなたが想像されているように、わたしが読者のことを忘れたわけでは決してありません。まさに読者にたいする責任感が、あなたのおすすめになる真理の歪曲に同意することを禁じるのです。¹³⁾

この手紙には、1966年5月5日の日付がついている。アフマトヴァの死から二カ月後である。フルシチョフ失脚から一年半たっている。このころ編集者たちには、「スターリンの蛮行」を活字にしないことが義務づけられていた。

チウコーフスカヤは記憶の抹殺に手をかすことを断わり、ミーリチクの本は序文なしで出版された。ミーリチクは、執筆途中で殺されたので、作品は未完である。編集者は未完の理由を読者に知らせなければならない。しかし、殺害について書くことは禁止されている。そこで次のような注がつけられた。

「著者は本を完成することができなかった。1938年2月イ・イ・ミーリチクの人生は悲劇的に途切れた。¹⁴⁾」

ミーリチクの遺族もチウコーフスカヤの友人たちも、彼女の処置に不満だった。それは、彼らには、実質的な意味をもたない抵抗におもわれた。1938年に死んだと書くだけで、ソヴェトの読者ならどんな死に方をしたか分るので、逮捕という文字をけずって序文をのせてもらうべきだった、と彼らはいった。

チウコーフスカヤには、計算があった。もし「一行一句」をけずらなければ、序文だけでなく、ミーリチクの本そのものが出版されなくなるとしたら、本を救うために妥協する、しかし、本は序文なしで出版されると確信していたので、記憶根絶の共犯者にならないように序文を犠牲にした。彼女は、このように弁明した。これにたいして、編集者の要求もいれ序文も救うべきであった、と反論された。

朝鮮語に官災という言葉がある。古代インドでも権力が、天災とならんで、災難の一つに数えられた。本を書いているときに、まるで天災のようになんのいわれもなく襲ってくる権力の災いにまきこまれ、未完の作品を残して消えてしまった作家に、たとえ死後であれ、本を贈ることは、生き残った者の義務である。生き残った者たちは、死者の本を出版するために、事実を歪めた序文や注や後書きを出版の交換条件として受け入れてきた。流刑と収容所で衰弱死した夫の詩集をだすために、マンデリシュタムの未亡人は、詩人の生涯を歪めたリフシツの醜悪な序文が付くことに反対しなかった。アフマトヴァは、自分のことをまるで別人のように解説しているスルコーフの文を付けることによって詩集をだしてもらえた。本を救うための妥協は、常識であった。

チウコーフスカヤは、本が出版される得と真実が歪曲される損とを天秤にかける慣習を「算術」

とよんでいる。彼女も「算術」をおこなってきた。アフマートヴァは、権力の動きを見すえて、活字になる詩句を一行一行ふやしていった。

チウコーフスカヤは、アフマートヴァの死後、孤立無援の闘いをすすめるなかで、かけひきをすて、「算術」をやめ、真正面から闘いをいどんだ。目に見えないところで決められ、一言も民衆に発表されない秘密の指令に従って、民衆の受難史が消されていく。彼女は、もはや「算術」によって行動することを自分に許せなくなった。

スターリン時代の犠牲者のことを忘れさせるためには、記念碑、慰霊塔、記念墓地をつくってはならない。だから、ソヴェトにはそれらは存在しない。

「罪もないのに責め殺された人びとをしのぶ喪の日はいつなのか。共同墓地、滅ぼされた者の名をきざんだ記念碑、追善の日に肉親や友人たちが誰はばかることもなく泣くために花輪や花たばをもって訪れることのできる墓地はどこにあるのか。そして最後に、密告を注文した者たち、この注文をはたした者たちの名簿はどこにあるのか、そして、次の者の……いや、もう沢山だ。墓には沈黙と哀しみがふさわしい。

復讐を問題にしているのではない、齒には齒をというやり方を提案しているのではない。仇うちには魅力を感じない。わたしは、刑事上の裁きでなく、社会的な裁きについて語っている。¹⁵⁾」

これは、スターリンの十五回忌を記念して語られたチウコーフスカヤの言葉である。この年、1968年、ソヴェト軍はプラハに侵入した。

スターリン時代史の一部空洞化政策のおかげで加害者は野放し、被害者は野ざらしになっている。この状況のもとで、チウコーフスカヤは、権力者や刑吏や密告者への復讐でなく、スターリン時代の冷静な科学的な解明のための「思想と言葉」を創りだすよう呼びかけた。

「罪のない人びとの死から新たな仕置ではなく、明晰な思想が出てくるようにしよう。そして正確な言葉が。

生命力あふれる働き盛りの人間を冷たい死体に変えた機構がねじの一つ一つにいたるまで研究されることを望む。¹⁶⁾」

スターリン的なものの再発を防止するためのこのあたりまえの要求は、歴史的汚点を国家機密にしたブレージュネフ政権の政策と対立する。チウコーフスカヤは、反ソ分子として活字の世界から追放された。記憶のために闘う者は異端になる。

「記憶は、人間の貴重な宝である、それなしには、良心も名誉も知的な仕事もありえない。¹⁷⁾」

この人間の宝を守る闘いは、「記憶の権化」¹⁸⁾としてのアフマートヴァの作品を守る闘いでもある。

レイザ・パラートニクという女性が、「自主出版」のなかから気に入ったものの写しをとり友人

にくばった。そのなかには、チウコーフスカヤの公開状やアフマートヴァの『鎮魂歌』がふくまれていた。それらの文書は、「中傷的で、ソヴェトの社会・国家体制、ソヴェト共産党と政府の政策、社会主義的民主主義と法秩序を誹謗する」¹⁹⁾ものとして、パラートニクが二年の刑をうけたことを、チウコーフスカヤは、1971年の夏に知った。彼女は、ウクライナ共和国最高裁へ抗議と『鎮魂歌』擁護の手紙を送った。

手紙は、いうまでもなく、パラートニクを救うことはできない。しかし、彼女は、沈黙することもしない。彼女は、記憶の抹殺に抗議し、受難の個人史を文字にした者にたいする弾圧を非難し、公開質問状を書いた。彼女は、民衆の無数の手がつくりだす伝声管へ自分の原稿を放った。その一つの手がパラートニクであった。

ソルジェニーツィンは、ソヴェト人の受難史を書いていた。1969年11月5日ソルジェニーツィンは、記憶再現の執拗な努力のためにソヴェト作家同盟を除名された。これは、職業的に創作活動をする権利と可能性を公的にうばわれることを意味する。

チウコーフスカヤは、作家同盟理事会に抗議する。

「わたしは、アレクサンドル・ソルジェニーツィンの作家同盟からの除名を国辱とみなす」²⁰⁾。

1973年末に『収容所群島』ロシア語版の第一巻がフランスで出版された。チウコーフスカヤは、ソヴェト人がまだ知らないこの本について知らせるため、「自主出版」の流れに手紙を放った。彼女は、また、シニャフスキとダニエリの裁判、パステルナークとサーハロフへの迫害にも抗議した。

このような活動により、チウコーフスカヤは、1974年1月9日付で作家同盟を除名された。こんどは、彼女についての記憶が公的に消される番である。

一か月後、1974年2月12日午後5時、国家保安委員会は、八人の要員を派遣してソルジェニーツィンを逮捕した。この知らせをうけて、チウコーフスカヤは、ソルジェニーツィンの家にかけてつけた。

ソルジェニーツィン逮捕

劇の第五幕が始まった。

自分の偉大さと栄光を侮辱されるにまかせている国に恥辱を。

舌がやっとこで抜きとられる国に災を。

だまされる民に不幸を。

今、家族と友人たちと乱暴に引きはなされ、民衆の前でそしられ、まさに今、この時、無法な暴力と無言の決闘をしている人に、祝福と支えを。

リージヤ・チウコーフスカヤ

1974年2月12日

23時 モスクワ²¹⁾

これは、ソヴェトの「偉大さ」「栄光」「舌」であるソルジェニーツィンをたたえ、はげまし、彼への迫害を見て見ぬふりをする者すべてを呪う檄文である。

チウコーフスカヤは、半盲にもかかわらず、たえず書きつづけた。彼女の晩年の仕事を代表するのは、『アンナ・アフマートヴァについての手記』二巻（1976年、1980年 パリ）である。これは、人びとが後難をおそれて記録を残さず、残った記録も焼きすてた時代に記るされた、国家権力と詩人とのかかわりあいについての、現場からの報告である。これは、また、記憶を守る仕事にたずさわった人間についての記憶である。

アフマートヴァ死後のチウコーフスカヤの生活は、この本の続篇である。

4

ブレジネフは、フルシチョーフを追放し、1964年10月14日党第一書記になった。1966年4月8日に、第一書記を、スターリン時代と同じ書記長という名称に変え、彼は、死ぬまでの地位にとどまる。彼は、ソ連邦元師（1976年）、ソヴェト最高会議議長（1977年）となって、党と軍の最高位をもつ国家元首におさまリ、社会主義労働英雄、ソ連邦英雄の称号をもち、文学部門のレーニン賞にいたるまでさまざまな賞と勲章を受け、政治、社会科学、文学の権威だと「公認」させた。彼は、年とともに、病氣と栄養と権限を増やしつづけ、外国旅行には、医療器具をつんだバスを持っていった。携帯用の病院をもって外国を公式訪問するこの権力者に、だれも引退を勧告することはできなかった。

ブレジネフは、1982年11月10日に病死した。18年1カ月のブレジネフ時代に、フルシチョーフがあばいたもの、発表を許したものに検閲の蓋がされ、スターリン時代の民衆の受難史はそっくり「見るなの坐敷」に入れられてしまう。

アフマートヴァの『鎮魂歌』は、この時期にどのようなあつかいをうけただろうか。

この18年間に三人の専門家がアフマートヴァについて単行本を出版した。

(1) アレクセイ・パヴロフスキイ著、『アンナ・アフマートヴァ。創作概論』、レニングラード出版社、1966年、5万部。

(2) エフィム・ドービン著、『アンナ・アフマートヴァの詩』、ソヴェトの作家レニングラード支所、1968年、2万部。

(3) ヴィクトル・ジルムーンスキイ著、『アンナ・アフマートヴァの創作』、科学アカデミー出版所レニングラード支所、1973年、5万部。

(4) (1)の第二版、レニングラード出版社、1982年、5万部。

検閲下のこの四冊をたどれば、ブレジネフ時代の『鎮魂歌』の運命がうかびあがる。

① パヴロフスキイは、1966年の初版では、『鎮魂歌』にアフマトヴァ一家の悲劇が反映されており、それがスターリンの暴政の結果であると最少限度だけ読者に暗示することを許された。

「しかし戦争に先立つこの複雑な時期に、もう一つの劇的な一頁があった。『われわれは、攻撃を一つとしてかわしたことはなかった²²⁾』と、アフマトヴァが云ったのには訳があった。この時期の民主主義の規範の侵害は、彼女の家族にもおよんだ。彼女は、『鎮魂歌』(1935—1940年)——苦しんでいる母の心の告白——を書く。

この詩は、表現形態の点では民衆の泣歌、哀歌に、つまり、フォクロワに近い悲しみの心にみたまれている。²³⁾」

「民主主義の規範の侵害」という官僚的定まり文句は、スターリンの暴政の代用表現である。

パヴロフスキイによれば、詩人個人と民衆の苦しみ悲しみとが『鎮魂歌』のなかに融合している。この合一から、アフマトヴァは、大きな詩人として出てくる。『鎮魂歌』をつくっていた1935年から1940年にかけてアフマトヴァの詩が政治の分野をふくみこむほどに領域を拡大したことは、パヴロフスキイによれば、彼女の詩人としての成長史における重要な一步である。民衆が苦しんでいる時に自分の詩で民衆に奉仕しようとする「自覚された目的²⁴⁾」が、政治詩の経験と相まって、第二次大戦中に戦闘的な詩を書かせた、とパヴロフスキイはみる。

彼は、アフマトヴァの詩人としての道が苦しいものであった、「そのうえ、時代が、彼女にたいして情深かったことも、せめて公正であったことも、あまりなかった²⁵⁾」と認めている。主語が時代になっているのは、党や政府を加害者として明示することが許されないからである。ジダーノフ批判という受難についても、「闘う良心」をもったアフマトヴァは、『鎮魂歌』と1946年以後のいくつかの詩に反映されている逆境に耐えざるを得なかった²⁶⁾と、あいまいにしか書けない。

パヴロフスキイは、後期のアフマトヴァの創作の核として「真の自覚した歴史主義²⁷⁾」をあげ、この点で彼女は、「逸脱を許さない厳しい歴史主義²⁸⁾」を原則とするソヴェト文学のおかげを多分にこうむっていると、奇妙なしめくりをおこなう。

アフマトヴァはまさに、公認の「歴史主義」にあらがって、自分の歴史主義を守ったのである。都合の悪い事実を消し都合の良い事実を反復復習する歴史主義にさからって、鎮魂の詩をつくった。パヴロフスキイは、この相反するものを一つに合わせることによって、アフマトヴァを“賞讃し”、彼女にソヴェト文学における市民権をあたえる。

「アフマトヴァの詩は、社会主義文化の切りはなせない一部である²⁹⁾」。

パヴロフスキイの本(初版)から推測できる『鎮魂歌』への検閲の内容は、次の四点である。

1. アフマトヴァが『鎮魂歌』を書いた事実は公認する。
2. 『鎮魂歌』にアフマトヴァ個人の悲劇が反映されていることを指摘してもよい。
3. その悲劇の内容を具体的に書いてはいけ(息子の逮捕、監獄、収容所、流刑等)。
4. その悲劇をスターリンと具体的に結びつけてはいけ(ない)。

『鎮魂歌』は禁書である。禁書について書くことを一切禁止すれば、首尾一貫するが、自主出版^{サミズダート}

という民衆版で多くのソヴェト人がすでに『鎮魂歌』を読んでいるため、そのような作品が存在しないふりをするのは、もはやこっけいである。民衆版の普及力が『鎮魂歌』の存在を公認させた。しかし、禁をとかせることはできない。『鎮魂歌』の内容を具体的に語ることは禁じられている。表札だけかかげることを許し、その家の中を見ることも見せることも禁じられているような状況である。

② ブレージネフ時代の初期には、まだ検閲のばらつきがあった。ドービンは、パヴロフスキよりも運がよかった。

ドービンは、アフマートヴァの生活に悲劇が起ったことをまず指摘する。

「しかし『主人公のいない詩』の作者の家族に苦難がふりかかる時期がやってきた。³⁰⁾」

この一節は、初出（『文学の諸問題』1966年9月号）では、次のようになっていた。

「しかしスターリン崇拜の時期に苦難が詩人自身にふりかかった。³¹⁾」

単行本（1968年）ではスターリンがぬけおちた。³²⁾

雑誌の初出に許されていたものが、本になるとき削られ、具体的な指摘は抽象的な文句に変えられている。それでもその後には考えられない自由の一片が、ドービンの本にはまだ残っていた。

「詩『なぎさにて』のなかで、静かなフルートの調べのようにひびいていた主題——自分のものになった他人の苦しみ——は、『鎮魂歌』のなかで強まった。アフマートヴァは、自分の不幸のゆえに多くの人びとの不幸を完全に感じとることができた。

またもや追善の時が近づいた。

私はあなたたちを見、聞き、感じる。

かろうじて窓口まで連れて行ってもらった女を、

生みの大地をふめない女を……

彼女たちから聞き盗ったとぼしい言葉から

彼女たちのために広い覆いを織った。

悲しみに満ちている詩、アフマートヴァのアナベスト³³⁾のなかに、何かネクラースフ的なものがみられる。

別れの短かい歌を汽笛が歌った時のことだ。

自分の熱い涙で正月の氷に穴をあける様を。³⁴⁾

ここに引用されている詩は、『鎮魂歌』の公式に印刷が許されていない部分である。発禁のまま、地下で流布している詩句である。したがって、引用が許されたこと自体、一つの意味をもつ。しかし、これは、初出の雑誌にのった『主人公のいない詩』からの引用を削ずる代りに許されたと考えられる。雑誌には、スターリン時代の受難をはっきりと語った詩句が引用されていた。内容が直接的に伝わらない引用にさし変えられたから、これは、不等価交換である。

『鎮魂歌』の引用では、「あなたたち」が作者と一緒に牢獄のまゝで差入れのためにならんだ女たちであり、「窓口」が牢の受付の窓口であり、「汽笛」が囚人列車の出発の汽笛であり、「正月の水……」は息子が未決囚として入っている監獄の前で立ちつくす詩人の落涙の熱さであることなど、分らない。ドービンは、引用を許されながら、それについて説明することも語ることも許されていない。「スターリン崇拜」という文字すら削られている本のなかで、それを望むことはできない。

ドービンの本は、1976年に出た『主題と現実』のなかに再録されている。上記の部分に関しては変更はない。

③ ジルムーンスキイの本（1973年）には、『鎮魂歌』の存在が明記されているだけで、いかなる説明もない。この本に先立って発表された『アンナ・アフマートヴァの創作について。生誕八十周年記念』（『新世界』1969年6月号）では、次のように記されているだけである。

「個人的なだけでなく、深く愛国的な主題が、アフマートヴァを悲劇的な連作詩『鎮魂歌』（1935—1940年）の創造へと向わせた。³⁵⁾」

④ パヴロフスキイの本（1966年）は、1982年に再版された。初版は、非スターリン化政策のおこぼれにあずかれた最後の年に出版された。再版は、非フルシチョーフ化も、スターリン時代史の書きかえ作業も一段落した、ブレジネフ時代最後の年に出版された。この年月の爪痕が再版にみられる。

たとえば、「しかし戦争に先立つこの複雑な時期に……」の部分は、八割も削られている。「民主主義の規範の侵害」、「苦しんでいる母の心の告白」等の表現は消えて、「私生活上に悲しい出来事がおこった日々³⁶⁾」という表現に変えられている。初版の抽象的な言いまわしにほの見えていた因果関係の暗示が、完全にとりさられている。

次のような種類の変更もある。

「彼女は、『鎮魂歌』と1946年以後のいくつかの詩に反映されている逆境に耐えざるを得なかった。」（初版）

「彼女は、『鎮魂歌』と戦後のいくつかの詩に反映されている逆境に耐えた。」³⁷⁾（再版）

この変更は、国家権力という他者によってもたらされた詩人の「逆境」を、詩人個人の私的な理由によって生じたように錯覚させる。1946年という具体的な表現が「戦後の」とぼやかされたのは、1946年がジダーノフ批判を暗示するからである。これは、アフマートヴァが不当に攻撃された1946年という年を消すことによって、詩人が国家からひどい仕打ちをうけたことを隠そうとする試みである。

パヴロフスキイ、ドービン、ジルムーンスキイの三人の本から推測できる、『鎮魂歌』にたいするブレジネフ時代の処置は、最終的には、次のようになる。

一、アフマートヴァが『鎮魂歌』を書いた事実は認める。

二、『鎮魂歌』にうたわれているアフマートヴァ一家の悲劇の内容にふれてはいけない。

三、『鎮魂歌』がスターリン権力の受難者についての作品であることを指摘してはいけない。

四、『鎮魂歌』論を書いてはいけない。

五、『鎮魂歌』の作者アフマトヴァが党と国家からこうむったいかなる災難についても書いてはいけない。

『鎮魂歌』にたいするこのようなあつかいは、ソヴェト史からソヴェト国家権力による民衆の受難史を削りとり、その空白へドイツ・ファシズムを主敵とする外国勢力によるソヴェト人の苦しみを入れ、災いは外からのみやってきたと歴史を書きかえ、スターリン以後の新しい世代を過去についての真実の「害」と「毒」から守ろうとする基本政策の一環である。

社会主義国家が自らの建設史の傷を隠すことによって、体制を自画自讃するとき、歴史から学ぶ、学べという自らの信条を裏切っている。それを足げにしながら、歴史主義を唱えている。アフマトヴァの鎮魂の詩群は、そのような都合のよい歴史主義にとって都合が悪い。だから、アフマトヴァは改造される。鎮魂の主題など無縁の詩人にしてから、アフマトヴァを公認する。その都合の悪い作品ゆえに詩人を全面否定する、文学史に登場させない、無害な作品も出版しない——このようなあつかいが不可能なほど彼女の詩が深く広く民衆に入りこんでいるために、政治的な処方箋にしたがって詩人像がつくられ、そのつくられた像が文学史に登場する。ソヴェト版の作品集のなかにいるアフマトヴァは、この像である。

これは、魂をぬかれた木偶にすぎない。

国家権力にとって、アフマトヴァの公認の像の作成は、全面否定できない詩人にたいする譲歩である。

記憶抹殺の政策がつづくかぎり、この奇妙な譲歩もまたつづくだろう。

すでにみた『鎮魂歌』への検閲は、アフマトヴァへの政治的処方箋の一部である。それは、アフマトヴァの公認の像をきざむ小刀であった。

注

- 1) 本稿は、アンナ・アフマトヴァ（1889—1966）の『鎮魂歌』を事例として、社会主義国家権力と詩および詩人との関係を追求した連作の第五部である。
- 2) Новый мир, 1966, № 3, стр. 285.
- 3) 同
- 4) Бег времени, Л., "Советский писатель. Ленинградское отделение", 1965, стр. 425.
- 5) 同上 428頁
- 6) Памяти Ахматовой, Paris, YMCA-Press, 1974, стр. 24.
- 7) Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 2, Paris, YMCA-Press, 1980, стр. 391.
- 8) Анна Ахматова, Сочинения, т. 1, München, "Международное литературное содружество", 1967, стр. 370.

- 9) 同
- 10) Записки об Анне Ахматовой, т. 2, стр. 192.
- 11) Лидия Чуковская, Процесс исключения, Paris, YMCA-Press, 1979, стр. 42.
- 12) 同
- 13) 同上 44-45頁
Открытое слово にもこの手紙が収録されているが、数語異なる。
- 14) Лидия Чуковская, Открытое слово, New York, "Хроника", 1976, стр. 22.
- 15) 同上 41頁
- 16) 同上 41-42頁
- 17) 同上 45頁
- 18) 同
- 19) 同上 69頁
- 20) 同上 65頁
- 21) 同上 107頁
- 22) Анна Ахматова, Anno Domini, Издание второе, Петербург, "Петрополис" и "Алконост", 1923, стр. 14.
- 23) А. И. Павловский, Анна Ахматова. Очерк творчества, Л., "Лениздат", 1966, стр. 107.
- 24) 同上 115頁
- 25) 同上 178頁
- 26) 同
- 27) 同上 190頁
- 28) 同
- 29) 同
- 30) Е. С. Добин, Поэзия Анны Ахматовой, Л., "Советский писатель. Ленинградское отделение", 1968, стр. 222.
- 31) Вопросы литературы, 1966, №9, стр. 74-75.
このあと、『主人公のいない詩』の鎮魂の主題にふれ、スターリンの暴政の受難者たちについて詩句の引用と解説がつづく。『主人公のいない詩』については、別稿であつかうので、本稿ではあえてふれないでおく。
- 32) 単行本では、このあと、『石の言葉が……』が引用されている。これは、『鎮魂歌』の公式に印刷が許されている部分である。雑誌の初出では、この引用の代りに、『主人公のいない詩』のなかの発禁部分——スターリン時代の受難者たちについて語られている詩句——が引用されていた。
- 33) 力点のない音節が二つ続いたあとに力点のある音節が一つくる詩脚。
UUˊˊ
- 34) Поэзия Анны Ахматовой, стр. 223.
- 35) Новый мир, 1969, №6, стр. 247.
- 36) А. И. Павловский, Анна Ахматова. Очерк творчества, Л., "Лениздат", 1982, стр. 93.
- 37) 同上 162-163頁

付 録

帝政ロシアとソヴェトで生前に単行本として出版されたアフマートヴァの詩および詩集の初版

- ①『夕べ』, 詩人工房, ベテルブルク, 1912年, 300部
- ②『数珠』, 極北人, ペトログラード, 1914年
- ③『白い鳥の群れ』, 極北人, ペトログラード, 1917年, 2000部
- ④『なぎさにて』, 人面鳥, ベテルブルク, 1921年, 3000部
- ⑤『おおぼこ』, 石の都, ペトログラード, 1921年, 1000部
- ⑥『主の年』, 石の都, ベテルブルク, 1922年, 2000部
- ⑦『六冊の本から』, ソヴェトの作家, レニングラード, 1940年, 10,000部
- ⑧『選集』, ソヴェトの作家, タシケント, 1943年, 10,000部
- ⑨『詩選集』, プラウダ, モスクワ, 1946年, 100,000部
- ⑩『詩 1909~1945年』, 文学出版社, モスクワ・レニングラード, 1946年, 10,000部
- ⑪『詩』, 文学出版社, モスクワ, 1958年, 25,000部
- ⑫『詩 1909~1960年』, 文学出版社, モスクワ, 1961年, 50,000部
- ⑬『時の疾走』, ソヴェトの作家レニングラード支社, レニングラード, 1965年, 50,000部

補 注

『鎮魂歌』への検閲の変化から明かなように, スターリン時代の暗黒面を活字の世界からしめだす仕事は, 1967年に完了した。この証明を, 歴史学と映画からの実例によって, 補強しよう。

(1) ネークリチ事件

1965年, 歴史学者アレクサンドル・ネークリチは, 『1941年6月22日』¹⁾という本を出版した。題名は, 独ソ戦開始の日を意味する。この本は, 出版物における国家機密保護局, 軍, 軍謀報部, 国家保安委員会, 外務省による五つの検閲を通過して出版された。ネークリチは, 軍の幹部にたいする大量粛清による軍の弱体化等が原因になって戦争準備がおくれ, 戦争初期の大敗北と人的損害が, スターリンとその側近の責任であることを立証した²⁾。検閲によって「洗われ洗いつくされた」本であり, 専門家から高い評価をうけているにもかかわらず, 1967年へむけて歴史の掃除をやり始めたブレジネフ政権は, スターリンおよびソヴェト政府に責任があるとするネークリチの主張を撤回するよう求めた。

さまざまな働きかけと圧力にもかかわらず, ネークリチは, 自説を守りつづけ, 1967年6月28日付で党を除名された。同年8月20日, 出版物における国家機密保護局は, 禁書を保管する設備をもたない図書館にたいし, ネークリチの本『1941年6月22日』の焼却命令をだした。その後, ネークリチから博士号をうばう企てがなされたが, 科学アカデミー総裁の抗議で中止された。

スターリン批判の立場を放棄し, 歴史を歪曲しないかぎり歴史家としての生活は不可能になり, ネークリチは, 1976年6月, ユダヤ人の国外移住という形をとって出国した。

(2) 映画『そこは静かだ』

映画の脚本『荒涼たる大地』³⁾は, 1966年に印刷された。脚本は, 独ソ戦中にあった実話にもとづいて書かれた。懲罪大隊が登場する。これは, 囚人の集団であり, 弾丸⁴⁾よけに使われた。彼らは, 命がけの仕事にかりだされ, 血を流せば, 自分の血で

罪をあがなるとみなされて普通の隊にいられる。「血によって清めた」というスタンプが用意されていた。

この脚本にもとづいて映画がつくられた。まもなく1967年になろうとしていた。映画を検閲した映画国家委員会は、懲罪大隊を消すよう要求した。「そのようなものはソヴェトに存在しなかった」ということになったのである。脚本家たちは、映画を救うために、懲罪大隊を建設大隊と吹き変え、主役の懲罪大隊員を、普通の隊の降格された将校に変えた。爆弾で片耳をふきとばされた兵士が、懲罪大隊から解放されるので、自分の負傷に狂喜する場面などもけずられた。

スターリン時代の悲劇は、いつの時代にもどこの国にもある話になり、実話は嘘になり、映画は存在理由を失ってから上映を許可された。⁶⁾

この二例は、大海の一滴である。

1967年は、スターリン時代史への遮断機がおりた年である。スターリン時代史の事実の部分的で不均等な解禁は、先細りになりながら1956年から1966年までつづいた。

1967年は、十月革命五十周年記念祭であった。祭神は、五十年間のソヴェト史そのものである。汚れた神を祭ることはできない。祭にむけてソヴェト史は、洗われ浄められ、半分以上をしめるスターリン時代が立入り禁止区域にされた。上記の二例は、祭の準備の過程でおこったことである。

スターリン時代史の浄化は、その賞讃へとむかう。スターリンは、「再評価」される。

ソヴェトでは、歴史の事実が、党の路線にしたがって出沒する。歴史の真実は、党の路線と連動性になっている。

補注への注

1) A. M. Некрич, 1941, 22 июня, М., "Наука", 1965.

2) A. M. Некрич, Отрешись от страха, London, Overseas Publications Interchange, 1979, стр. 215.

3) 軍事科学の専門家であるビョートル・グリゴレンコ元將軍は、ネークリチの見解の正当性を科学的に証明している。

П. Г. Григоренко, Скрытие исторической правды ... преступление перед народом/в кн.: Мысли сумасшедшего, Amsterdam, The Alexander Herzen Foundation, 1973, стр. 31-93/.

4) アレクサンドル・トヴァルドーフスキイが編集長をしていた『新世界』1966年1月号にネークリチの本にたいする賞讃の書評がでた。

Г. Федоров, Мера ответственности.

5) Искусство кино, 1966, №2.

6) 『荒涼たる大地』は、『そこは静かだ』と題名がかわった。モスフィルム製作、監督シチュウキン。

これらの事実が、脚本を書いたゴリゴーリイ・スヴィルスキイが亡命後に公表した。

Григорий Сви́рский, На лобном месте, London, Overseas Publications Interchange, 1979, стр. 448-452.

(連作第五部おわり)

1986年